ソシュールからラカンへ

――シニフィアンの概念をめぐる考察――

伊　藤　正　博

1．問題の所在

以下の考察は，ジャック・ラカンの精神分析理論の鍵概念をなしているシニフィアン（signifiant）の概念へと，シニフィアンという用語の生みの親であるフェルディナン・ド・ソシュールの側から接近する試みである。ラカンは1950年代以降この語を頻繁に使用するようになるが，後に見るように，ラカンの用法は当初から，ソシュールがこの語に与えた定義から逸脱している。また，通常は言語学の対象領域には属さない身体的症状や夢といったものにまで，ラカンのシニフィアン概念は適用されている。さらにラカンの使用例だけに限って見ても，この語は多義的な使われ方をしているという指摘がなされてもいる[1)]。にもかかわらず彼はこの語にあまり明確な定義を与えていない[2)]。

ラカンがシニフィアンの概念を明確に定義しなかった理由はいくつか想像することができる。たとえば，精神病と神経症とを包括的に論じることを可能にするような主体の構造の理論を立てるための操作概念（operative Begriff）として，わざと広い意味をもたせてこの概念を使用していたという側面もあろうし，また，具体的な分析関係の中でそのつど特殊な文脈において見出されるシニフィアンに，文脈を捨象した一般的な定義を与えることは困難であるという側面もあるだろう。しかし少なくとも言えることは，ラカンはソシュールのシニフィアン概念と自分のシニフィアン概念との違いをそれほど強調する必要を覚えなかったということである[3)]。ラカンは，自分はソシュールの思想の核心をなすものを把握しているという確信を抱いており，その独自の理解に基づいてシニフィアンという語を使用していた。それゆえ一見するとラカンがソシュールから遠く隔たっているように見える場合にも，ラカン自身は，ソシュールの基本的発想に忠実にシニフィアンという語を用いていると思っていたはずである。

そのように考えることができるのは，彼がソシュールの思想とフロイトの思想とを重ね合わせるようにして両者のテクストを読んでいるからである。すなわちラカンは一方でフロイトの中にシニフィアン概念の先取りを読み取るとともに[4)],他方でソシュールの中にフロイトの無意識概念を見出しているのである[5)]。そのような読解に基づいて彼は自分のフロイトの読み方の正当性を熱心に主張し続けたのであるから，同様にして，自分はソシュールに対して忠実であるという主張を展開することも彼にはできたはずである。ラカンがその方向に議論を展開しなかったのは，彼の関心が精神分析の問題に集中していたためであろうと思われる。すなわちソシュールに関しては，あえて言語学者たちとの論争に立ち入ってまで自分の解釈の正当性を認めてもらう必要はない，といったところだったのではないかと思われる。

もっともソシュールに関する文献学的研究の今後の深化とともに，そのようにしてソシュールとフロイトとを重ね合わせることには無理がある，という結論が出てくる可能性はある。実際のところは，両者の思想を重ね合わせてもはみ出してしまうところに，ラカンが自分の理論を置き入れて読んでいるだけなのかも知れない。しか

しここではそのような事実関係は問題にしない。ここで問いたいのは，たとえ実態はラカンによる深読みの産物であったとしても，彼がソシュールの中に見出したと信じ，自分が継承していると信じていたのはどのような思想であったのか，ということである。そのために以下では，ラカンが理解していたと思われる方向へとソシュール像を絞り込むことを賭金として，ラカンのシニフィアン概念につながる道筋を引き出すという試みを行いたい。

1．ラングとその外部

ソシュールが言語学の対象領域の画定のために払った努力のうちには，強大な国家の政治的権力や文化的影響力による弱小諸地方語の圧殺のお先棒かつぎという役割を言語学に果たさせまいとする配慮が含まれているように見える。たとえば「ラングは文法学者から誤りと見なされるようなこともする。けれども実はそれは誤りではない。というのもラングによって認可されるのは，ラングによって直接認められるものだけだからである」[5)]といったラングの捉え方の内にも，異なるラング間の境界を定めることの困難を指摘したいくつかの議論[6)]の内にも，ともすればフランス語やドイツ語のような「国語」と比較してその単なる変異形と見なされがちな地方語に対して，言語学の対象としての正統的な地位を保障するための配慮が働いているように見える。また，実際にソシュールがスイス諸地方語に対して関心を抱いていたことを示すいくつかのエピソードも伝えられている[7)]。それらのことから見ると，スイスの人々の日常生活のなかで育まれてきた諸地方語のほうを権威・権力を背景に公文書や公教育を通してそこに侵入してくる諸国語よりも重視する，いわば民俗学者としての一面をソシュールが持っていたと想定しても，それほど無理ではないように思われる。もちろんソシュールの言語学の構想が単なる民俗学的な視点からの言語学の修正にとどまるものではなく，「言語それ自体」を相手取った遠大な企てであることは言うまでもないことであるけれども，彼が終のすみかとして選びもした土地の言語への愛着や権力作用に無批判的に取り込まれまいとする科学者としての倫理がソシュールに一つの方向づけを与えた可能性は高いのではないだろうか。そこで以下に，ラングという言語学的カテゴリーはソシュールがこの民俗学的関心によって与えられた方向にむかって，しかしながらある必要に迫られて，民俗学的関心の射程をはるかに超えたところまで論理を押し進めた結果として得られたものである，という想定に基づいて，一つの仮説を立ててみたい。

ラングの概念を練り上げるに先立って，ソシュールはひとまず次のような推論を行ったと思われる。すなわち，彼はまず「正しい国語」という覆いを取り払って「由緒正しい」諸地方語が並立する層を露呈させる。国語という唯一の基準との比較を通して地方語を捉えるという立場を去って，いかなる特権的なラングも設けずに諸地方語どうしを比較する立場へと移行するのである。しかし彼はこの立場に留まることができない。なぜなら，たとえ現存する直接的な政治的権力ではなくとも「由緒正しさ」もまた一種の権力であるには違いない以上，地方語の下にはさらに由緒も知れぬ下位地方語が覆い隠されていると考えられるからである。そこで今度は地方語の層が邪魔な覆いとして取り除かれ，下位地方語が表面に出されることになる。だがどれほど弱小な下位地方語であろうとも，その伝統を支える文化的な権力なしに存立しているわけではない以上，この権力によって覆い隠されているさらに小規模な諸ラングの層があるということになる。このようにして特権的なラングの層を一つ一つ取り除け，より小規模なラングの層へと還元を進めてゆけば，結局，人はそれぞれの生育環境の違いに応じて一人一人が異なるラングを持っていると言うほかなくなるだろう。けれどもそれではラングは個人的なものとなってしまい，一つの言語集団に受け入れられた規範であるというラングの定義から外れてしまう。だがこの問題は心に留め置いて，ひとまず推論の先を見てみよう。一人の人間という単位は，まだ最終的な到着点ではない。どの層におけるラングも歴史的に見れば一定不変ではないが，とりわけ一人の人間の頭の中にある「ラング」は，その人間が最初に言葉を発して以来，紆余曲折を経て，今，ここにあるラングとなったはずである。したがって，各人の頭の中にある個人的な言語的規範をラングと呼ぶこ

とを認めるならば，さらに一歩踏み込んで，各人の生涯の各時点ごとに一つづつラングを割り当てなければならないということになる。こうして，還元を徹底的におし進めるならば，一つの時点における語る主体(sujet parlant)という最終単位に到達する。以上のような推論である。

この推論からは二つの問題領域が開けてくる。一つは，この推論の副産物として析出される諸権力（一つのラングの「正しさ」に根拠を与える文化的な力）の作用の経路と末端における効果とにかかわる問題領域である。上の推論は一見すると権力の作用を完全に免れたラングを導き出すプロセスであるかに見えるけれども，実は還元をどこまで遂行しても，そのような純粋ラングには到達しない。「還元」は，その考察対象であるラングから権力の作用を「除去」する作業では決してないからである。還元を一歩進めるごとに現れてくる下位のラングは，上位のラングを規定する権力の作用とそれに拮抗する別の権力の作用とがぶつかり合うことによって成立しているラングである。還元はただ，そのような下位のラングを上位のラングの変異形として捉える立場を去って，別の独立したラングとして捉えかえすだけである。それゆえ，むしろ還元を進めるごとに，そこに現出するラングを規定する権力は多元的になってくるのである。

したがって上の推論を通して露呈されてくるのは純粋ラングなどではなく，むしろ語る主体の最深部にまで及んでいる権力の作用のさまざまなあり方なのである。推論のこの側面，とりわけ社会制度の種々相に注目するならば，一つのラング，一つの語る主体がさまざまな権力の多方向からの作用の総和として構成されているありさまを具体的に分析・再構成するという課題が見出されるであろう。これが上の推論を通して開示される第一の問題領域である。ソシュールが外的言語学（linguistique externe）として位置づけた領域がこれであり，また，たとえば医学的ディスクールの成立を跡づけるためにミシェル・フーコーが行ったいくつかの例証なども，この方向へと踏み込んだ探究であると言えるだろう。

一方，もうひとつの問題領域は，ラングの概念そのものにかかわる，したがってソシュールの言う内的言語学（linguistique interne）にかかわる問題領域である。すなわち上に見たように，推論を一定の水準を越えて進めて行くと，ラングのもつ社会制度としての性格がだんだん曖昧になり，ついには損なわれてしまう。その結果，そこに現れてくるものはもはや，言語学が通常想定する会話場面の範囲に納まるものだけではなくなってくる。たとえば，一社会の構成員の一人一人が自分だけが「正しく美しい共通語」を話していると思っているが，実はどの一人の信ずる言語共同体も実在せず，各人各様に私的方言をでっちあげているにすぎない，という状況をその一つのモデルとして考えることができる。細かく観察すればこちらのほうが言語学者たちの一般に設定するモデルよりも私たちの現実に近いのではあるけれども，ここで各人の遵守している規範は，一つの言語共同体を規定する，というラングの条件を満たしていない。

とはいえ，この例にあってはまだ各人の個人的規則は，他の人々に変換の手続きを強いつつも現に社会的流通に乗っているかぎりにおいて，一つのラングの萌芽状態であるとも言える。だがさらに還元を一歩進めると，ラングの概念は完全に崩壊する。すなわち次に現れるのは，「正常な」大人たちだけから成る言語共同体という暗黙の前提が取り払われて，幼児のかたことや精神病者のネオロジスムといった言葉が紛れ込んでくる層である。もちろんそれらの言葉は私たちの耳に入る言語現象の一部であるし，幼児や精神病者と「正常」な大人たちとの間の言葉のやりとりも存在する。けれどもそれはラングの概念を危機にさらすことなしには言語学が接近することのできない領域である。というのは，たとえ「正常」な大人たち一人一人の頭の中にある言語規範が厳密には決して相互に一致しないとしても，その場合にはまだ，それらの言語規範が内的規範として当人たちに受け止められていることに変わりはないけれども，幼児や精神病者にとっても同様であるかどうかは，もはや言語学のみによっては決定することのできない問題だからである。この問題を最後まで追究すると，幼児が生まれて初めて言語に出会う場面では何が起こっているのかという問題に行き着くことになるだろう。ラカンがソシュールの内に見出し，独自の仕方で掘り下げて行ったのは，こちらの領域である。

以上のように上の推論は，フーコーが取り組んだ真理と権力との関係についての問題やラカンが取り組んだ象徴的去勢（castration symbolique）の問題を喚起する。しかしソシュールにとっての当面の問題はそのいずれでもない。ソシュールの関心は言語学の諸カテゴリーを練り上げることに向かっている。それでは何のためにこのような推論を押し進める必要があるのか。もしソシュールの関心が民俗学の枠内に留まっているのであれば，それほど何度も還元の操作を繰り返す必要はないはずである。実際のところ「講義」においてソシュールが取り上げている下層部のラングの実例は，せいぜい民俗学的水準において現れるラングである。それにもかかわらず権力の還元という操作をとことんまで進めるとどうなるかという問いをソシュールが立てたのは，逆説的ではあるが，言語学の諸カテゴリーを定義するためには差し当たり「国語」として権威づけられたラングに準拠せざるをえない，という状況認識が彼の内にあったからであると推察される。

詳しく説明しよう。諸地方語は国語より古い歴史を持っている。したがってそれらが国語から派生したものではないことは明らかである。けれども，それらが言語学的対象として言語学者の前に姿を現すのは，国語という鏡に映し出されることによってでしかない。そしてそのようにして諸地方語が見出されるとき，以下のような仕方で国語の規範性は諸地方語自身の内に取り込まれるのである。すなわち，ラングという概念にはその定義からして規範的な性格が含まれてはいるけれども，具体的な個々のラングを取り上げる場合には，言語学者はそれを一つの社会的事実として取り扱う。その場合，言語学者は通常，上に見た幼児の言葉や精神病者の言葉を不純物として取り除いて，「正常な大人たち」の言葉だけを国語なり地方語なりとして考察の俎上に上らせる。なるほど「正常な大人たち」のラングが当該社会の他のメンバーに対して規範として機能しているのは紛れもない事実であるから，自分はありのままの事実としてのラングを取り扱っていると言語学者が思うのも無理はないように見える。ところが一見すると当然の作業に見える上の手続きは，実際にはラングを事実的存在から規範的理念へとすり替える手続きにほかならない。それというのもこの不純物の除去作業にあっては，一つのラングが規範として社会的に機能しているという事実がそのまま，そのラングが当該社会のメンバー全員に「内的」規範として受け入れられているということと等置されているからである。その結果，そのラングを外的規範として押しつけられているに過ぎない語る主体とその可能的ラングとが，そのような手続きを通して洗い落とされ，視野の外に追いやられることになってしまう。

たとえば子供に「正しい」言葉遣いの教育が行われるという現象をとり上げてみよう。教育が行われるということは，子供にとっては，一つのラングが外から押しつけられるということである。それゆえ教育が行われつつあるその時点では，そのラングは未だ子供自身に内在化されたラングであるとは言えない。逆にいえばこのことは，たとえ個人的で一時的なものであれ，子供のパロールは別の基準を持っているということ，つまり可能的ラングに向かって開かれているということを意味している。それゆえ一つの言語共同体の内部で教育が行われているということは，子供の可能的ラングを抑圧し，その脅威を絶えず除去し続けることを通して，一つのラングが維持・再生産されている，ということでもある。しかし言語学者の眼には，それらの可能的ラングに基づくパロールは，一つのラングが内的規範として受け入れられる過程で生じる一時的な「誤り」としか映らない。そのため言語学者は一つのラングを取り出すために，それらの可能的ラングを不純物として洗い流してしまう。このようにして「正しい国語」の持つ規範性は，言語学者の理論的態度それ自体の側から，いわば背後から，地方語という対象の中にも滑り込んでくるのである。[8)]

したがって先に見た推論も，一見したところは「正しい国語」という基準を捨て去って諸地方語をそれ自体において捉えなおすという試みからはじめて，上位のラングから下位のラングを見下ろすといった視線を次々に廃棄していく操作を遂行しているように見えはしても，実際には逆に，諸地方語をはじめ下位の諸層に属する諸ラングを多数のミニ「国語」に変換して浮かび上がらせる操作を繰り返しているのである。また，ソシュールは古

代ギリシア語やサンスクリット語にも言及してはいるけれども，そこで参照されているのは近代の諸学によって照らし出されたかぎりでの古代ギリシア語やサンスクリット語でしかない。つまり，さしあたりのところは地方語も古代語も，近代ヨーロッパの諸国語という鏡に移った姿で，すなわち近代ヨーロッパの諸国語の側へと強引に引き寄せられた格好で，言語学者の前に現れるほかないのである。それゆえ，たとえ諸ラングを横並びにして，どのラングにも共通する本質的なものを抽出したとしても，せいぜい「正しい国語」の本質をつかまされるのが関の山なのである。このからくりをソシュールは十分に承知していたと思われる。したがって彼が民俗学のレベルに留まらなかったのも当然のことである。

さてそれでは，一つの社会制度であるというラングの定義を裏切る地点にまですすめられた上の推論は，この状況を打ち破ることのできるどのような積極的な意味をもっているのか。それは，一つの言語学によって開示された対象領域の周縁部として現れる，当の言語学のパースペクティヴ上に出現するにもかかわらず決してこの言語学の手の届かない領域，という意味におけるこの言語学にとっての「外部」をかいま見る，という意味を持っている。ソシュールにとっては，そのような「外部」の所在を確認することが重要だったのである。というのもこの「外部」をより所にして，その輪郭をなぞるように言語学を体系的に整理するならば，いわば体系の中心部に空いた「穴」としてこの「外部」を位置づけることができ，そしてこの「穴」に準拠することによって「国語」を相対化して捉えることができるからである。

具体的に説明しよう。「外部」としてかいま見られるのは，上に見た幼児や精神病者の言葉という例がその典型をなすような言葉たち，通常は「未熟な」言葉であるとか「誤った」用法であるとか見なされる言葉たちが並び立って現れる層である。もちろんそのような層にも権力の作用が及んでいないわけではないけれども，そこでの権力の現れ方は言語学者の側から持ち込まれる規範性とは決して一致しない。というのもこの層にはラングとしての条件を完備したラングは見出されないからである。それは言語学の対象領域ではありえず，それゆえ言語学者の立場から見れば，もはや地質学的比喩を用いて「層」と呼ぶことのできない領域である。それは言語学の対象領域がそこから浮かび上がってくる背景を形成する領域でしかない。

けれども見方を変えれば，言語学の対象領域の下にはそのような領域が海水のように拡がっており，ラングは氷山のようにそこに浮かんでいるとも言える。それゆえ仮にもしその海中に身を沈めることができるならば，諸ラングが氷山のように浮かんでいるありさまを上方に見ることができるであろう。つまり，そこまで降りて行けば国語の規範性という呪縛から解放された視点からラングを見ることができるであろう。おそらくソシュールはそのようなことを考え，そのような視点を想定しつつ，言語学の諸カテゴリーの画定に取り掛かったのである。すなわち，ラングを氷山のように浮かべる言葉の海こそが，ソシュール言語学の真の基準なのである。

もっともソシュールといえども「国語」の内側から語るほかない以上，この基準を明確な仕方で措定することはできない。したがってそれは，単なる「穴」として位置づけるしかない隠された基準，「講義」の叙述の表面には決して現れてこないネガティヴな基準にとどまる。上に見た推論の正体は，国語の規範的拘束力を免れたところからラングを捉えるために必要な，この隠された基準へと錨を投げ下ろす作業だったのである。ソシュールが「講義」で取り上げる実例は諸国語から地方語までの上層のラングに限られているけれども，彼のラングの概念それ自体は以上のようなストラテジーに基づいて定義され，使用されているのである。

さて以上は，ラカンがソシュールの中に読み取ったであろうこととしてわたしが立てた仮説である。実際にはソシュールはこのようなストラテジーに訴える計画を持って「講義」を始めたのではなかったのかも知れない。彼はただ単に，言語学者の眼差しを規定しているさまざまな先入見を「講義」を進める過程でそのつど注意深く取り除いていっただけなのかもしれない。けれどもここでは，そのような問題は問わない。ここでの問題は，ラカンがソシュールの中に見出し，ソシュール自身の立てたものと見なして継承したものは何であったかというこ

とである。それゆえ，たとえ実際にはそれがソシュールの自覚するところではなかったとしても，一つの理論的継承関係の可能性を提示することができさえすれば，本稿の目的は達せられることになる。わたしの仮説によれば，ラカンはソシュールの議論が上記のような「穴」の周囲を廻って展開されていることを見抜き，そして，みずから直接その「穴」の中に降りていったと考えられる。そのための命綱としてラカンはソシュールのシニフィアン概念を必要とするとともに，また，この命綱を延長する（シニフィアン概念を拡張する）ことを必要としたと考えられるのである。それではラングに関する以上の仮説を前提として，シニフィアン概念の検討に入ろう。

2．シニフィアンとは何か

ソシュールはラングの構成要素であるシーニュ（言語記号）を，聴覚イメージ（image acoustique），概念（concept）という二側面から成る心的な単位（éntité mentale）として捉え，これら両側面の不可分離性を強調するために聴覚イメージをシニフィアン，概念をシニフィエと呼ぶことを提唱した。聴覚イメージ，概念，という語によってソシュールがどのようなことを考えていたのかははっきりしない。けれども，それぞれ独立して存立する両者があとから結合してシーニュを形成し，そのようなシーニュが集まってラングを形成する，と考える通俗的な理解を退けるために彼が強調した以下のような諸特質にしたがって，ある程度は彼の考えの幅を限定することができる。

聴覚イメージは，同じラングに属する他の聴覚イメージとの差異を通してのみ同定可能を要素であり，したがって必ずしも音声的素材に依存しないと言われる。それゆえ仮に一つのラングと一対一に対応する差異の体系を視覚的素材や触覚的素材を用いて作ったならば，それらの体系はモデルとされたラングと同一ラングであると見なされ，その構成要素もまた素材のいかんにかかわらず聴覚イメージという名で呼ばれることになる[9]。一方，ソシュールにあっては，概念は聴覚イメージと一対一に対応して成立するものであると考えられている。したがって必然的に概念の場合も，一つの概念は他の諸概念との差異においてのみ規定可能であるということになる。つまり聴覚イメージも概念も，一つのラングという閉じた体系の内部で分節化され，その体系の中に占める位置の差異によってのみ規定される要素である，と考えられているのである。

以上のような定義が当てはまるシーニュは当然，ラングとしての諸条件を完備した一つのラングの内部にしか見出されない。けれどもソシュールがそこに議論を限定しているということは，彼がそこしか見ていないということではない。ここでもやはり彼は下から見上げるようにして対象を捉えている。すなわちソシュールは，シニフィエとの結合という条件を欠いた「可能的シニフィアン」が犇めきあっている言葉の海に身を沈めて，上方に浮かぶラングの中で諸シーニュが分節化されるありさまを見上げているのである。ただ，ソシュールは「正しい国語」の支配下で叙述を進めるというストラテジーを採っているため，ラングを規定する権力の問題やラングの外部に見られる言語的事象の問題は「講義」の中に表立って現れてこないのである。例えばシニフィアンとシニフィエとの結合の恣意性をめぐる一連の議論にあっても，全く恣意的な仕方で両者を結びつけ，かつ，その結びつきをして個々の語る主体によっては変更不可能なものたらしめている権力の問題は，ラングにおける時間的要因（le facteur temps dans la langue）の問題として示唆されるにとどまっている[10]。ソシュールは，言語学の諸カテゴリーを明確化するための代償として，この問題を共時的言語学の水準で直接的に検討するという道を自らに禁ずるのである。

けれども言語学の諸カテゴリーが明確化されたのちに，あたかも抑圧されたものが回帰するようにして，言語学の対象領域の内部に，すなわち上層のラングの水準で生じる通時的変化という現象の内に，この問題は再び現れてくる。通時的考察にあっては，ラングを個別的ラングとして捉える視線が取り払われるとともに，そのような視線の形成それ自体をも射程に入れて，言語を形成する諸力に考察の焦点が合わされる。そしてそれにともなって，シーニュの音声形態や価値の歴史的変化が視野に入

ってくる。つまりソシュールの禁欲は，迂回路を経て再びラングにおける「時間的要因」の問題に出会うためのストラテジーなのである。くわしくいえば，ラングの外部，つまり上述の「穴」の中で生起していることそれ自体については明確な仕方で把握することができないので，一旦，ラングの水準において言語学的諸カテゴリーを明確化しておき，そのあとで，通時的変化の水準に見られるシーニュの生成・消滅や価値変動を，「穴」の中で生起していることと照応関係にある運動として捉える，というストラテジーである。

以上のような観点から見れば，シニフィエに対するシニフィアンの優位という考えは既にソシュールの内に認められるということになる。ラカンはソシュールの内にこの考えを読み取り，それをを発展させてシニフィアン概念を「穴」の中にまで適用可能な概念へと拡張したと考えられる。そしてその拡張されたシニフィアン概念をたよりに，彼は「穴」の中に降りていったのである。ラカンのシニフィアン概念が曖昧に見えるのは，ひとつにはこの概念の拡張のせいである。けれども一方では，ラカンによるシニフィアン概念の拡張は，ソシュールの文脈だけからは窺い知れないシニフィアンの諸側面に光を当て，ソシュールの概念としてのシニフィアン概念を豊かにする，という結果を生じさせてもいる。それゆえソシュールの立場から見れば，ラカンのやったことは功罪相半ばしていると言えるであろう ラカン自身はもちろん功が勝っていると思っていたはずである[11)]

ラカンはまず，諸シーニュ間の交換関係に基づいて価値（valeur）の概念を導き出すソシュールの議論を，一つのシーニュの表象に基づいてシニフィアンとシニフィエとの関係を説明する議論の内に置き入れることによって，シニフィアン／シニフィエ関係をシニフィアンどうしの関係に還元したと思われる。ソシュールが価値と呼ぶのは，諸シーニュが意義の類似に基づいて形成する交換可能性のネットワークの中で一つのシーニュが占める位置のことである。一つのラングの内部で考えるならば，価値とは，辞書のなかで見出し項目の位置にあるシーニュが，その諸定義，諸用法の叙述を形成する諸シーニュに対して有する関係であると考えることができる。だが，個々の語る主体は一つのラング内でのシニフィアンとシニフィエとの結びつきのあり方を自由に変更できず，ただ辞書通りの用法を遵守するしかないのであるから，結局のところ，価値はシニフィエと一致することになる。それゆえ一つのラングの内部で考えるかぎりでは，一つのシニフィアンとの不可分離的な表象関係において見られた場合には「シニフィエ」，他の諸概念との交換関係において見られた場合には「価値」，という呼び分けがなされているに過ぎないと考えてよいだろう。

一つのシーニュのシニフィエとそのシーニュの価値とが等しいものであるならば，次のような移行操作が可能である。すなわち，わたしたちが辞書を引く場合には通常，一つのシーニュに属する概念的意味をそこに探している。つまり，わたしたちは見出し項目のシニフィアンに結びついているシニフィエを定義・用法の叙述の中に探している。だが見出し項目と定義・用法との関係は価値の観点から見ればシーニュ／諸シーニュという関係である。これを当てはめて図式化すれば，わたしたちは辞書を引く場合，シニフィアン／？／諸シニフィアン／諸シニフィエという関係の，左端のシニフィアンと結びつくシニフィエとして，右端の諸シニフィエを求めていることになる。いまこの右項を次々と価値関係に置き換えるならば（定義・用法を形成する諸シーニュを見出し項目の側に置き直して，その定義・用法を調べるという操作を繰り返せば），シニフィアン／シニフィアン／シニフィアン／シニフィアン・・・／？という連鎖が現れる。つまり，価値の観点をシニフィアン／シニフィエ関係の中に持ち込むならば，左端のシニフィアンのシニフィエを，二番目以降のシニフィアンの無限の連鎖へと還元することができる（ただしその末端には？が残ることを忘れてはならない）。ラカンはまず，このような還元を行ったと考えられる。

以上のような還元に基づいてソシュールの意味におけるパロール（ラングに基づく具体的な発話）を捉え直してみると，次のようなことが言える。すなわち，パロールの場に一つのシニフィアンが現れるということは，そのシニフィアンが別の諸シニフィアンの代わりにパロールの中のその場所を占めるということである。そして上

に見たように，そのシニフィアンによって取って代わられたために潜在化してパロールの場に現れてこない諸シニフィアンと最後の？とを足したものが，そのシニフィアンのシニフィエであると考えられる。それゆえパロールとは，一方において顕在的なシニフィアンどうしの交替・連接運動であると同時に，他方において，あるシニフィアンが顕在化して別のシニフィアンが潜在化するという交替・連接運動でもある，ということになる。つまりパロールの進行を通して縦横両方向にシニフィアンが配列されるのである。パロールが単にラングの現勢化にすぎないかぎりにおいて，潜在的シニフイアンの配列もまたラングの一側面にほかならず，したがって，どのパロールにおける潜在的シニフィアンの配列もぴったり一致するということになる。

パロールについてのこのような見方に基づくならば，次のようにしてシニフィアンの概念をラングの外部にまで適用させることができる。すなわち，ラングの外部にあっては，パロール（上記のような意味におけるパロールではなく，たとえば幼児のことばや精神病者の幻聴など）が結びついている潜在的シニフィアンの配列が，不特定の要因の介入を被って変化していると考えればよいのである。たとえば，アナグラム等の形態上の類似，個人によって経験された出来事のなかでの隣接など，不特定の要因が随時顔を出すことによって潜在的シニフィアンの配列は揺れ動く。そして，それに応じて顕在化されたシニフィアンの配列も通常の場合とは異なったものになる。そのようなパロールは，ラングに照らし合わせて見るかぎりでは「間違った」表現であるとか，「意味をなさない」おしゃべりであるとか見なされることになるけれども，そのようなパロールもそれぞれに固有の潜在的シニフィアンの配列をもっていると考えるならば，その成り立ちはラングに基づくパロールと基本的に同じであると考えることができる。ラカンはひとまずこのようにしてシニフィアンの概念を拡張したのではないかと考えられる。そして，そのようなパロールの内に見出されるシニフィアンの配列のなかに，一つのラングよりも根源的なところで言語活動のあり方を制約している，一つのラングに準拠したパロールにも，夢や症状にも妥当する，一般的なシニフィアンの論理を見出していったのではないかと考えられる。

さて，以上のようにしてシニフィアンは一つのラングという閉域から解放される。それとともに権力の作用もまた，交替運動のなかにあるシニフィアンどうしの関係に還元されて，舞台裏に隠れる。いまや，シニフィアンはシニフィアンどうしの関係だけで成立している。その結果，今まで権力（ラング）との関連において規定されていた部分について，シニフィアンの概念を改めて規定し直す必要が生じてくる。すなわち，既に見たようにソシュールにあっては，シニフィアンはその担い手となる感覚的素材に制約されない純粋な差異であるとされた。しかし純粋な差異がこの一つのシニフィアンとして同定されることができるのは，それが，一つのラングという閉じた体系を前提として，その内部で分節化された差異であるからであった。つまり揺るぎないラングの同一性がシニフィアンの同一性のより所となっていた。これに対してラカンの場合には，ラングに相当する閉じた準拠体系が存在しないところでシニフィアンが考えられている。そこで，シニフィアンがこの一つのシニフィアンとして同定されることができるのはどのようにしてであるのか，という問題が改めて生じるとともに，たとえばシニフィアンの交替運動の起点，推進力，運動法則，目的ないし方向，等に関する一群の問題が生じてくる。

ラカンはこれらの問題に，シニフィアンの理論を欲望（désir）の理論として構成することを通して答えている。つまり，権力を背景に引き下がらせることによって欲望がクローズ・アップされてくるのである。ラカンにあっては，シニフィアンがこの一つのシニフィアンとして同定されることができるのは，欲望を形成し，満たそうとする主体的な運動によって縫い止められることによってである。しかしそれは，主体がみずからの欲するままに自由にシニフィアンを操作できるという意味ではない。むしろ主体はシニフィアンの領域に取り込まれ，シニフィアンに取り憑かれるようにして，欲望を形成し，満たそうとする運動に駆り立てられるのである。それゆえここでクローズ・アップされてくるのは，権力作用を内在化させた運動としての，大文字の他者（両親や社会）

の欲望に基づくシニフィアンの運動であり，主体はいわばその運動の媒体としての役割を果たすにすぎない。ラカンにあっては，このようにして主体を捕らえ，欲望を形成し，満たそうとする運動そのものの構造が，ソシュールの場合のラングに相当するシニフィアンの準拠システムの役割を果たすのである。以下に説明しよう。

ラカンはしばしば，みずからのシニフィアン概念の定義として「一つのシニフィアンは他のシニフィアンに向かって主体を表す（représenter）」という命題を提示している。この命題の意味するところは両義的である。第一に，一つのシニフィアン（S_1）は，他のシニフィアン（S_2およびそれ以降に続くすべてのシニフィアン）に対して主体の代表者として対峙する，という意味がある。すなわちS_1は主体が知らず知らずのうちにそれへと象徴的に同一化しているシニフィアン（たとえば「日本人」とか「わるい子」とか）である。S_1は生きた主体，生身の身体と重なり合ったシニフィアンである。けれども主体はまるごと全体としてS_1に同一化しているわけではない。S_1は生きた主体それ自体ではなく，主体の一部が交換価値，一般者として切り出され，固定されたものでしかないからである。いわばS_1は，主体全体の代理・代表者としてシニフィアンたちの集まりに出席しているのである。第二に，S_1はS_2以降のシニフィアンたちを代表して主体を表すシニフィアンとして選ばれている，という意味がある。このことは，S_1として選ばれたシニフィアンはそれ自体としては無意味化するということを意味している。すなわち，あたかも自分の名前がその言表された通りのことそれ自体をしか意味しないのと同じように，主体にとってS_1は自己言及的なシニフィアンとしてあるにすぎない。S_1のシニフィエの位置には他のシニフィアンは滑り込んでこない。S_1がシニフィアンの連鎖のなかに位置を占めるのは，他のシニフィアンによって取って代わられたものとしてでしかない。したがって通常はS_1それ自体は隠されており，S_2がそれに取って代わったという事実から溯って知られるだけである。それゆえS_1はS_2以降のシニフィアンの連鎖を形成する作用のなかに溶け込んでいるとも言えるし，また，いわばそのような仕方でS_1はシニフィアンの連鎖をつなぎ止める最後の？の位置を占めているとも言える。

S_2以降のシニフィアンがS_1に取って代わる運動に運ばれて，主体は「意味」の中に滑り込み，さまざまなシニフィアンと結びつきつつ，シニフィアンの連鎖を形成してゆく。だが，「意味」の領域に入ることのできるのは主体の一部でしかなく，他の部分はシニフィアンの領域の外部に消え去ってしまう[12)]。この事態をラカンは，ヘーゲルの『精神現象学』の「主人と奴隷」の章において奴隷に突き付けられる「自由か生命か」という選択に比較している。すなわち自由を選べば奴隷は自由も生命もともに失ってしまうから，生き延びるためには自由を放棄しなければならない。同じように，主体は生き延びるためには，自己固有の「存在」を放棄して，大文字の他者の領域（シニフィアンの領域）で「意味」として生きることを選ぶほかない。とはいえ，この選択において捨てられた主体の「存在」の部分は，なくなってしまうわけではない。S_2がS_1に取って代わる運動を通して，主体は，消え去った「存在」の部分と本来の自己を失った「意味」の部分とに分割されるのである。

ところでS_1は主体の「存在」と「意味」とが重なり合ったところに位置しているが，主体が「存在」と「意味」とへ分割されるとき，S_1のあった場所は，分割された「存在」と「意味」とのいずれの側からも切り離された場所として位置づけられる。すなわち一方でS_1は「無意味」のシニフィアンであるために，上の選択において「意味」が選ばれるとともに，シニフィアンであるにもかかわらず「存在」とともに消え去ってしまう（無意識のなかに落とされる）。つまり「意味」を選ぶことによって，主体は「存在」だけでなく大文字の他者の一部をも放棄せざるをえないのである。しかし他方で，無意味であるとはいってもS_1もまた一つのシニフィアンであることに変わりはないから，主体はS_1に同一化することによってその「存在」の一部を失う。それゆえ「存在」の側から見ればS_1のあった場所は，「存在」の一部がかつて在ったはずの場所，しかしながら今では「存在」から切り離された場所であるということになる。このようにしてS_1のあった場所は，「意味」の側からも「存在」の側からも切り離された場所，「意味」と「存在」とをともに欠いた空虚な

部分になる。そしてそれは，大文字の他者（シニフィアンの領域）における欠如であるとともに，大文字の他者の場からは消された「存在」としての主体における欠如でもある。この欠如こそ，ラカンが欲望と呼ぶところのものである。

大文字の他者における欠如と主体における欠如とが重なっているということは，大文字の他者の欲望と主体の欲望とが重なり合っているということを示している。そして,この欠如が生じるのはS_2がS_1に取って代わる運動を通してであるということは，この欠如が形成されるのはシニフィアンの論理にしたがってであるということを示している。そこで主体はこの欠如をシニフィアンによって満たそうとする運動に駆り立てられる。そしてその運動によって，主体はシニフィアンの連鎖を縫い止めてゆく。このとき主体の運動は，この欠如の場所に現れる幻想的対象を際限なく追い求めるという仕方で行われる。主体が追求する幻想的対象は，S_1に同一化することによって失われた主体自身の「存在」の一部が主体から切り離され，一つの対象の姿をまとって現れたものである。けれどもこの幻想的対象を主体は決して手に入れることができない。というのも，この幻想的対象の起源をなすのは幼児期に母子間の二者関係のなかで得られた満足体験の想起にともなう想像的表象であり，それは象徴的去勢（二者関係の切断，最初のS_1への同一化）を通して主体が喪失したものだからである。主体がシニフィアンの世界に入ることそれ自体によって失われたものは，シニフィアンの世界の中には捜し当てることができない。にもかかわらず主体は，あるはずのない幻想的対象をあったはずのものと思い込んで，シニフィアンの領域で空しい追求を繰り返すのである。

この誤認へと主体を導くのは，もはやここで詳しく説明する余裕はないが，母親（大文字の他者）の欲望である。それゆえ主体はみずからの欲望に関して全くイニシアティヴを持っておらず，母親の欲望がどのようなものであるかということが，主体の欲望の形成を方向づけているのである。しかしその母親自身がかつて主体の位置におかれ，その欲望を方向づけられた結果として母親の欲望があるのだということを考え合わせるならば，むしろ，世代を越えて諸主体を支配する一般的な欲望の流れがシニフィアンの領域にあらかじめ準備されていて，諸主体をこの流れに巻き込んでは欲望の主体，語る主体に仕立て上げてゆく，という再生産活動のメカニズムが浮かび上がってくる。それゆえラカンにあっては，主体を疑似餌でおびき寄せ，主体に取り憑いて，主体を際限のない追求に駆り立てることを通してみずからを再生産するこのシニフィアンの運動の構造こそが，シニフィアンの準拠システムをなしている，と言ってよいだろう。ラカンによるシニフィアン概念の拡張は，権力を舞台裏に退けることによって，却って権力の作用点において何が行われているかということをクローズ・アップして見せてくれるのである。

4．結びにかえて

ラカンは，シニフィアンの交替運動の起点に関しては象徴的去勢の理論として，その運動法則に関しては換喩と隠喩の理論として，その原因ないし目的に関しては根源的に失われた対象としての対象 a をめぐる議論の中で，それぞれ論じている。しかし残念ながら個々の議論をとりあげてシニフィアンの運動理論を再構成する余裕はもはやない。また以上の考察の中では，ラカンのシニフィアン概念における身体的側面に言及することができなかった。ラカンのいう欲望とは性的欲望であり，ラカンにあってはシニフィアンの象徴的身体性の問題は性的身体性の問題と結びつけて考察されている，とだけ最後に言い添えておきたい。これらのことについては「ソシュールからラカンへ」という問題設定を離れて改めて論じたい。

本研究実施にあたっては，平成6年度塚本学院教育研究補助費を受けました。

注

(1) 丸山圭三郎「ソシュールとラカン」,『現代思想』第9巻第8号, 124-125頁, 1981.

(2) ラカンはしばしば「一つのシニフィアンは別の一つのシニフィアンに向かって主体を表す」というテーゼを，みずからのシニフィアン概念の定義として提出している。しかしこれは定義というにはあまりにも曖昧な言い方である。Lacan, J.,“Ecrits”, Seuil,1966, p. 819. , p. 840. , etc.

(3) ラカンは「無意識における文字の審級」（1957）において，「ソシュールが，単一の声による発信と，わたしたちの書き言葉にあってはこの発信が水平に記載されることとにしたがって，ディスクールの連鎖にとって構成的であると見なした線状性は，事実上は必要であるとしても，十分ではありません。‥‥しかし，ソシュールの場合おそらくそうでしょうが，そこにポリフォニーが聞こえるようにされ，すべてのディスクールが一つの楽曲の複数の五線譜の上に並べられていることが証明されるためには，詩を聞けば十分です。」と述べている。そして1966年に付け加えられた註で，ソシュールのアナグラム研究ノートの発見（1964）によってこの推測の正しさが裏付けられたと指摘している。このエピソードはラカンのソシュールへの思い入れの深さを物語るとともに，それがけっして的外れではないことをも物語っている。Lacan,J., “Ecrits”, op.cit.,p.503.

(4) Lacan,J., “Ecrits”, op.cit.,p.688.
また，セミネール第七巻でラカンは，フロイトの『科学心理学草稿』（1895）に見られる通道（Bahnung）仮説がシニフィアンの連鎖を予測するものであること,フリース宛書簡52番（1896）に見られる知覚標識（Wahlnehmungszeichen）とは幼児における最初のシニフィアンのシステムにほかならないこと, などを論じている。 “Le Séminaire Ⅶ”, Seuil, 1986, pp.49-53.

(5) Lacan, J., “La psychanalyse et son enseignement”, dans “Ecrits”, op.cit.,p.447.

(6) Saussure,F.d.,“Cours de linguistique générale”（1er et 3me cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin, Texte établi par Komatsu, E.),1993, Université Gakushuin,p.115.
ソシュールは諸ラングの相互関係の水準でラングを捉えるだけでなく，ラング（言語）それ自体が存在するという根源的事実を正面から捉えようとしてもいる。通時的観点からの考察が諸ラングという意味でのラング概念の解消に向かっている（註 8 参照）ことからもそれは窺える。ただ，そうした根源的な問いを推し進める場合にも，諸ラングの相互関係の水準で与えられた諸カテゴリーなしには問題設定それ自体も成り立たないほどにそれらのカテゴリーに拘束されていることを, ソシュールは自覚していたと思われる。本稿ではラングの及ぼすこの拘束力に焦点を合わせて，諸ラングの水準でラングという概念を扱っている。

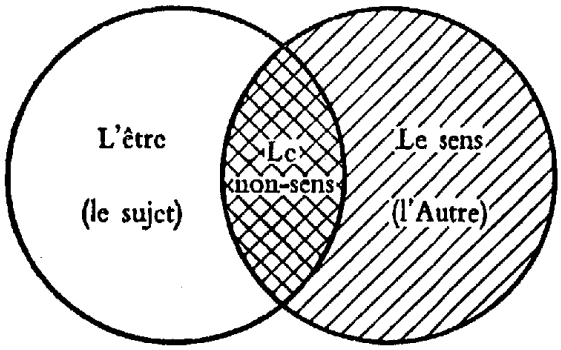
(6) Saussure, F.d.,op.cit.,pp.207-248.

(7) 丸山圭三郎編，『ソシュール小事典』, 1985, 大修館書店, 43頁, 48-50頁.

(8) 1894年1月4日付のメイエ宛書簡でソシュールは次のように述べている。「ずいぶん前からこういった言語事象の論理的分類, われわれがそれをとり扱ういろいろな視点の分類に関心をもっていますが, だんだんその仕事の巨大さがわかるようになってきました。その仕事とは，一つ一つの操作を前もって見ておいたカテゴリーに帰着させることにより, 言語学者にいったい≪彼の営為≫がどんなものかを示すことであります。」『ソシュール小事典』, 前出，40-42頁.

(9) したがって，通常の言語学の対象ではない身体的症状や夢にまでラカンがシニフィアン概念を適用したことは，それ自体としてはまだ，この概念の拡大適用には当たらない。ラカンのシニフィアン概念がソシュールから見て拡大適用に相当するのは，一つのラングとの一対一の対応関係を欠いた領域にまでこの概念を適用することによってである。

(10) Saussure, F.d.,op.cit.,pp.307-311.

(11) Lacan, J., “Radiophonie”dans “Scilicet”, Seuil, 1970, p.58.

(12) Lacan, J., “Le Séminaire”, Seuil, 1973, pp.192-193.
ここでラカンは以下のような「疎外」の図を示している。